

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年正月五

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一 東久世前少将書ヲ各国公使ニ贈リ、岩下佐次右衛門及ヒ伊藤俊助等ヲシテ、権リニ兵庫奉行ノ事ヲ管理セシムルコトヲ告ク正月十
八日
- 記 米里堅公使へ贈リタル書翰
- 一 忠義海陸軍務総督ヲ辞ス正月十
八日
- 記 辞表二通
- 留守居届書

一 藩老小松帯刀ヲシテ久光ニ代リ天氣ヲ伺ハシム正月十
八日

参照 寺師宗道日記節録

道島正亮日記節録

一 城下及諸郷銃砲諸隊京師救応トシテ出兵ス正月十
八日

記 藩記

参照 舊邦秘録

伊東蒙吉日記節録

一 藩役用票申手統並ニ一門以下所邑住居家計ノ節制ヲ達ス正月十
八日

一 兵具方与力以来兵具方附士ト改称ノ達

一 大久保利通日記節録

参照 復古記

一 朝敵諸家武器荷物ヲ没収スヘキコトヲ達セラル正月十
九日

記 達書並ニ留守居届書

一 隣境他領及旧幕領去就訊問ノ書ヲ発ス正月十
九日

記 案文伺書並ニ本案

一 幕府老中ヨリ諸船品川沖入津ノ節心得スヘキコトヲ達セラル

一 記 新納刑部持下書付（旧幕府老中触書及ヒ口達書等数件通報スルモノナリ）

一 藩騎兵所設置ノコトヲ達ス正月十
九日

全上

一 米良龜之助書ヲ桂右衛門ニ呈シ、出兵ノ人数ニ加ハラ
ンコトヲ求ム

木下俊愿家記節録

一 談合役木脇次郎右衛門隊伍ノ組立方ニ付、取調ヲ十ヶ

一 各国公使ノ神戸事件ニ対スル要求ヲ容レルコトヲ、各
国公使及ビ池田茂政ニ伝フ

郷暖中へ申達ノ件

備前藩へ達書

一 大口地頭談合役木脇次郎右衛門出兵ノ儀ニ付、出水地

春嶽私記

頭談合役へ申達ノ件

一 各国公使ニ局外中立ノ要求ヲ移牒セラル正月
十一日

一 日州旧幕領ノ年貢米千三拾石処分方ノ指揮請ヘル書

記 東久世前少将書翰

正月二
十日

参照 米国公使館書記官アルセホルトメン徳川慶喜

記 本書並ニ別紙三通

ニ贈ル書並ニ幕吏答書

一 豊前四日市ニ浪士押寄放火乱妨ニ付、細島在陳安藤作

一 議定議事規程ヲ達セラル正月二
十日

之丞外二名ヨリ奥掛書役衆へ申報セリ正月二
十日

記 本書

参照 花山院一件記備後以下口書節録

一 松方助左衛門正長崎奉行所処分ノ顛末ヲ藩老ニ申報ス

花山院一件記他

正月二
十二日

長崎縣記節録

記 本書

天草事記節録

一 澁谷彦助天草浪士鎮撫ノ顛末ヲ藩地ニ申報ス正月二
十二日

長崎縣記節録

参照 正月二十二日大久保利通日記節録(遷都一條)

全上

一 大宮御所新規築造ニ付、御入用トシテ万石以上高割納

全上

金ヲ達セラル

全上

記 申達書

藩吏上納金通牒書等

一 寺島陶蔵ヲ参与兼外国事務掛ト為シ兵庫ニ派遣セラル
正月廿三日

記 辞令

一 町田民部ヲ参与兼外国事務掛ト為シ長崎ニ派遣セラル
正月廿三日

記 辞令

一 五代才助ヲ参与兼外国事務掛ニ命セララル
正月廿三日

記 辞令

一 本藩戦亡者追福修行ヲ達ス

記 達書

一 西郷東国征討ノ追討使派遣ヲ必要トスル趣旨ヲ大久保

ニ報ス
正月廿三日

記 西郷吉之助書翰

一 道路ニ人ヲ暗殺スル者多キヲ以テ令シテ之ヲ嚴禁ス

正月廿三日

記 達令

一 参与會計事務掛三岡公正紙幣製造ノ議ヲ上ル、是日之ヲ可トシ公正ニ其事ヲ掌ラシム
正月廿三日

参照 春嶽私記節録

一 遷都ノ議

参照 正月廿三日大久保利通日記節録（遷都ノ議言上ノ件）

一 朝廷ヨリ金二万兩賜ハル
正月廿四日

記 令達並ニ留守居届書

参照 長州・尾州・藝州・越前・土州・宇和島へ

賜金ノ令達

一 大久保一蔵総裁局顧問被仰出
正月廿四日

記 辞令並ニ留守居届書

一 忠義公英医ウルユスヲ雇ヒ瘡痕ヲ治セシメンコトヲ請

フテ聴サル
正月廿四日

記 願書並ニ批紙及ヒ留守居届書

参照 關山糺ヨリ小松帶刀へ宛タル書（ウルユス帰庫

ニ付挨拶贈物ノ件）

一 忠義公機ヲ許サル
正月廿四日

記 令達並ニ留守居届書

一 勅使各国応答ニツキ評議ス

参照 正月廿四日大久保利通日記節録（勅使各国へ御

応答ノ評議ノ項）

八〇四 外国事務総督東久世前少将ヨリ各国公使

へ書ヲ贈ル

明治元年正月十八日、外国事務総督東久世前少将(通稱)、書ヲ

各国公使ニ贈リ、事務掛岩下佐次右衛門及ヒ伊藤俊助等
ヲシテ、権ニ兵庫奉行ノ事ヲ管理セシムルヲ告ク、

以手紙致啓上候、然ハ岩下佐次右衛門・伊藤俊助(補)・中

島作太郎(奉行)・寺島陶藏(長州藩士)・兵庫・神戸町運上所ニ於テ、

諸事取扱之役場申付候間、兵庫奉行ト可申名目之役場

相立候迄之間、御方ニ於テ奉行同様諸事引合可被成候、

尤右四人之内ニテ、太陽日之外神戸へ為相詰可申候間、

左様御承知可被下候、以上、

辰正月十八日

東久世前少将通稱

花押

米里堅公使

Robert B. van Valkenburg
セネラー・フアルケンホルク閣下

八〇五 島津忠義海陸軍務総督ヲ辞ス

明治元年一月十八日、忠義海陸軍務総督ヲ辞ス、
八〇五ノ一 昨日海陸軍総督之奉蒙

命、愈武門之冥加不過之、難有御受可仕儀御座候得共、
得卜熟考仕候処、兵馬之権不容易

皇国之大事件ニ御座候得ハ、若年不材之者、全ク其任
ニ不当、只員ニ備候而已ニテハ

朝廷之御失体、深奉恐入候付、何卒御断申上度御座候
間、宜敷御執

奏奉願候、以上、

正月十八日

薩摩少将

八〇五ノ二

西郷吉之助

右ハ先達テ参与被

仰付、且今度可為徴士被

仰付候旨、

御沙汰相成候得共、吉之助儀手許差支之儀モ有之候付、

相当之者不日為交代差出可申候間、何卒御免被

仰付被下度奉願候、此段宜敷御執

奏奉願候、以上、

正月十八日

薩摩少将

(記)

総督ノ命ヲ下リシモ、重職当ルベカラサルヲ以テ之ヲ辞ス、同時ニ西郷モ徴士・参与ヲ辞ス、

(按) 当時騷擾ノ際人心未タ危惧ヲ抱キ、各藩ノ情勢去就未タ定ラス、此際ニ当リ勢威ニ募ルノ嫌アルトキハ、大体ノ障妨トナルヲ以テ、一ハ他ノ視聽ヲ避クルニ出テタリト云フ、

八〇五ノ三
留守居ノ届書ヲ載ス

御書付二通

但海陸総督御断之儀 一通 御直名

西郷吉之助徴士・参与御断之儀 一通 御直名

右今日 禁中御仮建へ罷出、非藏人鴨脚加賀へ面会差出候処、参与岩倉侍従(具後)様正ニ御預被成、尚御披露ニ可被為及段、非藏人同人ヲ以被仰聞候、
右之通私相勸申候間、此段申上候、以上、

辰正月十八日

(奥山金生)
糺様

新納嘉藤二(立志)

八〇六 小松帯刀ヲシテ久光ニ代リ天氣ヲ伺ハシム

明治元年正月十八日、藩老小松帯刀ヲシテ久光ニ代リ天氣ヲ伺ハシム、

【参照一】

寺師宗道日記明治元年一月十七日

十七日晴明、今日春日丸・三邦丸軍艦出帆ニ付、手当向繁務なりし、小松帯刀殿ニも、三邦丸より備後鞆(鞆、広島県)辺迄ニテ、京師模様次第出京之賦ニ候由、夜ニ入退出なり、去ル九日・十日大坂戦争書付写也、
(寺師宗道日記(東京大学所蔵)にて校訂)

【参照二】

道島正亮日記明治元年正月十一日

正月

十一日ニ、小松帯刀御城代御事、千石仕廻次第上京被仰付候旨被仰渡候由、

但

小松ハ発起ヨリ第一ノ輩ナレハ、此節ノ事相知候付、直様発足イタシ、一騎駈候テ駈付可申儀、本意ニ可有之候処、仕廻次第抔ト、便々トイタシ候

明治元年(1868)

儀モ、何様之訳候ヤ、殊ニ御城代被仰付候程ノ勲
功モ有之候ヤ、是程御国ヲ動揺サスルモ、誰カ仕
業カ、能々記考スヘシ、

八〇七 城下及諸郷銃砲諸隊京師救応トシテ

出兵ス

明治元年正月十八日、城下及ヒ諸郷銃砲諸隊京師救応ト
シテ出兵ス、

(記)

正月十八日阿久根ヨリ出帆

一加世田 一隊
一飛騨郡 合テ大砲

一穎娃 一与

一郡山(日置郡) 合テ小銃 一与
一(同上) 伊集院

一出水 小銃 一小隊
一(久徳) 御城下 小銃 右同

右島津(久徳)左衛門殿、差引京師救応トシテ、小倉迄被差出
候、

右同日出立船中ヨリ、

一御城下 小銃一小隊
大砲隊半座

右ハ御軍賦役頭取奈良原幸五郎殿差引トシテ、正月十
八日出立、

小松帯刀殿長崎迄被差越候、

【参照一】

舊邦秘録

一正月十八日、日置ハ四五小隊ニテ、肥後領ヲ被差越候
事、

一同日、小松ハ与力隊ニ御城下士少々、三邦丸ヨリ出帆
ニテ候事、

【参照二】

伊東蒙古日記節録 (祐章)

正月十八日 微雨

今朝云々略、四ツ前出宅、陸軍所へ相揃、銘々彈薬
三十発宛請取、左候テ出軍ニ付御条書拜聞有之、町
田内膳殿ニテ候、大砲隊半座・与力隊一小隊・拙者
共救応隊一諸ニ拜聞仕候、畢テ云々、三邦丸へ乗込
候、右ノ隊々並海軍隊半座、小松大夫等ノ乗組ニテ
八ツ半比出船、(指宿市知林島)チリンノ洋通船ノ節夜入、終夜走通
シ、

正月十九日 陰

日州沖ニ至リ夜明ケ、夜入時分佐賀ノ關(天分懸)へ着艦碇泊、
御軍艦春日丸待合候賦ノ処、昨夜先ニ乗抜ケ候由ニ
テ、疾ニ碇泊相成居候事、

正月二十日 陰後雪

今晚七ツ半比両艦共同時ニ出帆、七ツ時分三田尻へ
着碇泊云々、乗頭有川矢九郎殿・奈良原幸五郎殿上
陸ノ処、讚州高松・伊豫松山・會津・桑名・備中松
山ノ儀征討被仰出、尤備中松山ノ儀ハ、備前岡山へ
追討被仰付候由相知レ候、今夜滞船云々、

正月二十一日 雪

今朝長州ヨリ両艦へ酒肴菜等着贈候、
四ツ時分両艦共出帆、夜入九ツ時分藝州御手洗へ着
船、碇泊云々、

正月二十二日

今朝五ツ時分出帆云々、九ツ半比備中ノ小野道(尾道)ト云
所ニ、春日丸繫船ニ付、同所へ碇泊、無程出帆云々、
今夜無間断通船云々、

正月二十三日

今朝日出前兵庫へ着艦云々、春日丸ハ無程跡ヨリ着

船云々、直ニ二艘共出帆、大坂川口へ着、直ニ一分
隊宛、小舟ヨリ兩御屋敷へ着云々、

正月二十四日・二十五日

今朝五ツ前着伏、兩方へ投宿、朝飯支度、四ツ時分
行軍ニテ出立入京、御屋敷へ着、隊長ヨリ御届申出、
暫時相扣、夫ヨリ又々行軍ニテ、西方清蓮寺下宿ノ
様着、尤左半隊ニテ、右半隊等ハ別宿ニ相成候云々、
正月二十六日略・二十七日

在宿猛助、七之丞殿・福崎喜十郎殿・上床八十右衛
門殿見舞、

拙者共救応隊被発、六小隊ノ内戦死等ノ欠跡へ被召
入筈ニ付、隊中致吟味何分申出候様、本宮ヨリ御達
シ相成候段、隊長ヨリ承知イタシ候付、打寄涉評議
候、

正月二十八日

九ツ時分ヨリ橋口與助殿・土持七之丞殿・小牟田平
八郎殿、其外数輩同伴徘徊云々、
廢隊ニ付テハ甚遺憾ニ依リ、是迄ノ通被立置、東征
ノ節先鋒相勤度存候方ハ、銘々筆ヲ執、姓名相記、
左候テ明日歎願ニ及ヒ、可然旨過半打寄評議候ト、

隊長所へモ數輩列立今夜差越、七十人余同意ノ方有之、右ヲ以明日小松家へ願ノ筈候事、

正月二十九日

永山喜之助殿其外數士列立、大夫へ廢隊一条懇願ノ処、御差返相成候得共、タマ〜上京ノ事ニ付被廢、本隊へ被召入、東征ニモ被遣候ハ、一統ノ安心ニモ可相成トノ御吟味ニ付テハ、強願候テハ御差返筈ノ段、明白ニ道筋モ相分リ、無致方廢隊ノ所ニ相決候、

征討將軍昨日御帰洛、東伐出軍ノ儀モ昨日御決議、昨日ハ、二條城ヨリ公家・武家衆、夥數下城ヲ見請候、

二月朔日

上文略、猛助ニモ、今日ヨリ兵庫燈炉台場警固ノ交代トシテ、差越候段、只今承知ノ由ニテ、諸道具片付方イタシ云々、

二月二日

入隊ノ儀、聞合トシテ昼ヨリ野村十郎太殿・土橋七之丞殿同伴、御屋敷へ差越、兒玉八之進殿へ差越候処、永山喜之助殿ニモ差越被居、夫ヨリ同伴、寺町

ヨリ誓願寺四條辺徘徊、暮過罷歸候云々、

二月三日

今日

主上二條城へ臨幸被為 在候事、

二月四日・五日・六日略、七日 陰

今日銘々入隊被仰付分散、拙者ニハ白砲隊へ願通被仰付云々、

一今日毛利長門守上京ノ由、

東征ノ儀モ弥御発ニ相成候事、

二月八日

東征ニ付テハ、一番ヨリ六番隊迄并大砲隊一番・二番半座宛、出軍被仰付迄ノ由致伝承云々、倉野直右衛門殿・川上彦八郎殿申談、六番隊ノ長野津七次殿〔鎮越〕へ頼入候処、三人共懇望通被仰付致安心候、白砲隊ノ儀モ、半座丈ケハ出軍被仰付候由候得共、彼方ハ相断候云々、日入前ヨリ大圓寺へ差越、倉野氏・川上氏同伴、御屋敷野津氏所へ引移シ、今晚酒吞共有之候、軍用金トシテ拾両頂戴被仰付候事、

二月九日

四・五・六番隊出軍被相延、十三日ノ筈候事、

八〇八 藩役用稟申手續並一門以下所邑住居家計

ノ節制ヲ達ス

正月十八日、藩役用稟申手續並一門以下所邑住居家計ノ節制ヲ達ス、

(記)

一 御一門方ヲ初、一所持・諸地頭・持切在並拘地所持之面々々、家内領地勝手住居被仰付候、此時節柄一統平常失費相省、御軍備精々充実候様可致、尤夫々家格之格式等モ有之事候へ共、イツレモ非常ノ御備第一之事候付、至重尊大之風致一新候様被仰付候、

右之通被仰付候条、向々へ可申渡候、

正月

- 〔島津久徳〕 圖書
- 〔小松清徳〕 帶刀
- 〔桂久武〕 右衛門
- 〔川上久徳〕 龍衛
- 〔町田久徳〕 内膳

八〇九 兵具方与力ヲ以後兵具方附士ト改称ノ達

一 御兵具方与力之儀、以来御兵具方附士ト相唱候様被仰

付候、左候テ支配勤方等之儀ハ、是迄之通可相心得候、

此旨御兵具奉行へ申渡、向々へ可申渡候、

正月・

右衛門

八一〇 大久保利通日記節録

大久保利通日記明治元年正月十八日

伊地知正治、従大坂帰京入来、同道出殿、

一 今日從御国元、三日立飛脚中村矢之助同断着、〔長胤〕 蓑田問

合等相達、

一 昼時ヨリ太政官へ参仕、備前夷人殺害一条ニ付、〔方平〕 岩下

氏・〔友臣〕 吉井ヨリ一封到来、〔眞臣〕 廣澤談合、岩倉公へ云々言上、

一 内国事務掛被 仰付、第一遷都ノ条、尚又当務之急ニ

付、廣澤ニモ示談云々言上、猶総裁三條公へモ言上候

様拜承、

一 將軍官御帰京相成候哉如何ト之議事有之、可然言上、

一 今日下坂之儀、御沙汰蒙居候得共、不及其儀段承知之

事、

正月十九日

一備前御処置一条・遷都之儀、條公総裁へ廣澤同道參殿、
言上イタシ候事、

一昼時分參仕、

内国掛被 仰付候ニ付、兩人ニテ相濟候丈ニ無之、

中根備前雪江

神山左多衛備前

廣澤兵助

右三人同掛被仰付候様〔雜岳〕辻談合、〔公純〕徳大寺公へ申上、即日

被 仰付候事、

越公・宇和島公參仕、外国掛ヨリ備前御処置一条言上、
於議事所御評議有之、公法ヲ以テ断然御所置被 仰付

候様、衆議決定之事、

一御所置ハ日置帶刀割腹之事、

朝議猶予二時比退散、

一十九日太政官代へ出席、

【参照】

復古記

明治元年正月十九日

忠尚申状

去ル十一日、西宮為出張兵庫駅出立、同勢繰出、神戸

町通行之砌、先手行列之中へ外国人兩人、左手ヨリ右
へ通掛候ニ付、差押候内、通詞之者取扱相止申候、尚

又一人、右手ヨリ左へ通掛候ニ付、差押候処、次之隊

へ掛り割込候ニ付、色々取扱、手真似ヲ以、供先へ相

廻候様申論候処、殊之外憤怒之顔色ニテ大声ヲ発シ、

理不尽ニ押通り、同時左手人家ヨリモ、一人短銃ヲ以

出合、狙掛候ニ付、其場之勢不得止、得道具ヲ以突掛

候処、浅手ニ御座候哉、何レモ家内へ逃去リ、其追迫

掛候処、裏口ヨリ供先ヲ浜手へ相廻申候、先手銃隊共

右之挙動ヲ見請、直ニ搏出候ニ付、種々相制候内、彼

モ浜手ヨリ及発砲候ニ付、一先人数ヲ山手へ繰込、見

合候内、外国人共更ニ銃卒押出シ、頻ニ搏掛候ニ付、

尚又此方ヨリモ及発砲申候、尤右ハ不慮ノ儀ヨリ差起

リ、此上大事ニ立至リ不申候様、早々人数引揚申候、

以上、

正月

備前少将家来

日置帶刀

八一 朝敵諸家ノ武器荷物ヲ没収スヘキコトヲ

達ス

明治元年正月十九日、朝敵諸家武器荷物ヲ没収スベキコトヲ達セラル、

今般

朝敵相成候面々ヨリ、武器類ハ勿論、荷物等預リ置候向ハ品物取揃、市中取締役所へ早々可差出事、留守居ノ届書ヲ載ス、

但

今般 朝敵相成候面々ヨリ、預置候武器類之儀、右ハ参与衆ヨリ、可相達被申渡候付申入候、参与御役所ヨリ被仰渡候間、相添此段申上候、以上、

辰正月十九日

新納嘉藤二

糺様

追テ、預置候武器類之儀ニ付、参与御役所へ罷出、相伺候処、

朝敵之面々ヨリ、市中へ預置候分之事ニ付、夫々屋敷へ分捕相成候品々ノ儀ハ、其国々之軍法通ニ取扱、差出ニ不及旨、非藏人ヨリ致承知候付、此段申上候、以上、

八二二 隣境他領及旧幕領去就訊問ノ書ヲ発ス

明治元年正月十九日、隣境他領及旧幕領去就訊問ノ書ヲ発セリ、

上方表追々之鬪戦、徳川氏既ニ反賊之所為依顯然、日州辺他領其外元幕領ハ勿論、豊後辺迄モ、不服 王威者共ハ、最早御誅伐相成候テハ、如何可有之哉、就テハ一先別紙之趣申入、無異儀致承服、銘々人質差出候藩々ハ、反正為証拠、一度ハ先手ニ被召仕可然哉、尤関外四ヶ郷其外極内致手当置、地頭並談合役・監軍請持掛・郡奉行江モ遂熟評、此段内分相伺候、以上、

高岡在勤

辰正月十九日

島津兵庫(欠)

町田内膳殿

手扣稿(別紙)

今般徳川氏数多之人衆ヲ率ヒ、於淀辺暴発、辱モ

(嘉彰親王)
仁和寺宮様

鳳輦ニ被為代

御親征、賊軍悉ク敗走、然ニ徳川氏、其以前大樹職被差免、領知被召上、

王政一途ニ復シ候付テハ、若哉數代徳川氏之眷顧ニ泥ミ、至此期心ヲ傾ケ、大義ヲ誤候者於有之ハ、無疑天道ニ背ク賊徒故、当時寡君議定職之命ヲ奉シ居、其俚隣境江召置候儀、奉対

朝廷重職ヲ汚シ候場ニ当リ候付、無致方即小兵ヲ差向、致誅戮候外無之、依テ尊藩御定論之趣承度、弥勤王ノ御赤心ニ候ハ、古例モ有之候故、聊御異心無之、御確証御差贈相成度事ニ候、

月日

本文及返詞候趣ハ、案文之由ニ有之候、

八一三 幕府老中ヨリ諸船品川沖入津ノ節心得ス

ヘキコトヲ達セラル

八三ノ一
正月九日

刑部持下候書付

一稻葉美濃守様御渡、大目付様ヨリ御触

大目付江

此度、御府内御取締筋之儀、被

仰出候付テハ、諸家手船並商人共所持之船ハ、品川沖入津之節ハ、蒸氣・帆前之無差別、其筋之モノ差遣、乗組

人勿論、米港之趣意等為承候筈ニ付、兼テ其心得可罷在候、右之趣万石以上之面々江、不洩様可被相触候、

正月

八三ノ二
覚

御軍備專要之御時節ニ付、当分御軍費之外ハ、都テ御入用御渡無之筈ニ候、諸向日用不可欠品ハ格別之儀、其余御買上品ハ勿論、御普請・御修覆等、追テ及沙汰候迄、一切取計不申儀ト可被心得候、

右之趣向々江可被相触候、

正月

右之通ニ候事、

八三ノ三
正月九日

一松浦肥前守様〔駿、平戸藩主〕・京極佐渡守様〔明敏、丸亀藩主〕・稻葉右京亮様御重役、

西丸江御呼出ニテ、御達之御書付、御同席触ニテ来ル、

左之通、

大目付川村信濃守様ヨリ御口達、去ル三日、上様為

御上洛、御先手會津・松山・姫路等罷出候之処、先方ヨリ砲發致候哉、是ヨリ砲發致候哉、何分耽トハ分リ

兼、全御用飛脚致到着候儀ニハ無之、飛脚屋ヨリ申出、併戦爭ハ慥ニ相違ハ無之候得共、勝敗モ分リ兼候、此程薩州動揺之節、船ニテ逃延候族モ有之、海路・陸路共襲来モ難計、何分戦国ト相成候心得ニテ、屋敷々々人数嚴重可致置候、只今ニモ彼等襲来モ難計、此段無急度拙者ヨリ御咄之旨、御同席中様江御内達被置候様、尤御用状到着致候ハ、何レ御一統江御達可申候得共、此段御心得迄御達申候事、

正月

右之通候事、

八三ノ四(患候、姫路藩志)
一酒井雅楽頭様御渡御書付写一通

御目付触

覚

在府万石以上

同 交替寄合

右明十九日四時、西丸江罷出候様可相達候、尤病氣幼少並在邑之面々ハ、重役罷出候様可被達候事、

正月十八日

右之通ニ候事、

八三ノ五
正月十九日

一依御触御重役代リ宮原淺右衛門、西丸江罷出候様、於大広間板倉伊賀守様・稻葉兵部大輔様御列座ニテ、諸家重役之者江御口達、

此度京攝騷擾関門行違ヨリ事起リ、

朝敵之名ヲ申触候哉ニモ、ホノカニ承知致シ候、全左様ニ無之、此上ハ誠意恭順之道ヲ以、行違之儀申立候心得、斯形勢成行候モ、全不肖薄徳之致処、

東照宮ニ対シ申訳無之、宗祖武百年来一同ニモ尽力満足ニ被思召、此上逆モ勉勵可尽忠勤候様、御頼ニ候、右之通ニ候事、

八一四 藩騎兵所設置ノコトヲ達ス

明治元年正月十九日、藩騎兵所設置ノコトヲ達セリ、

一御厩之事、

騎兵所

右ハ騎兵之儀、海陸軍三兵之中ニテ、不可欠一局ニ候間、御厩之号被廢、右之通被仰付、追々騎兵被召建候

条、此旨御馬預へ申渡、向々へ可致通達候、

正月

右衛門

正月十九日取次 北郷浪江

八一五 米良龜之助ヨリ桂右衛門へ出兵参加ヲ

歎願ス

正月十九日

去秋愚父主膳御当地へ罷出候節、奉願上置候通、為

天朝奉尽忠誠愚存罷在候得共、微力之私等父子、殊貧
迫之事故其儀不相叶、尤先祖元弘・建武之乱ヨリ、不得
時当今ニ到、実ニ悲歎至極ニ御座候、此上ハ私人成
共馳登リ、太守様受御指揮、為 天朝精力之限、奉
尽忠勤度御座候間、此表又々被為在御出兵之節ハ、御
人数之内へ被加御召候様、御取成之程、偏ニ御頼申上
候、以上、

正月十九日

米良龜之助

則元

桂 右衛門様

八一六 談合役木脇次郎右衛門隊伍ノ組立方ニ付

取調ヲ十ヶ郷噺中へ申達ス

正月十九日

一一隊五拾人ニ組立可被成候、其内仕長・伍長可被召付
候、此前之御備組ニ準シ、賦与可被宜候、

一一帳名前ノ上、順々持筒ノ玉目可被相記候、且早込入
付ハトロン付ノ訳、且何発分ノ玉目何分劣リト可被相
記候、

一御旗本ハ八拾人ニ可被賦候、

一出水へ救応ハ五拾人ニテ可被宜候、

一相図ハ貝ニ二挺可被用候、

右之通早目可被取調候、

談合役

正月十九日

木脇次郎右衛門

十ヶ郷

噺中

八一七 木脇次郎右衛門出兵ノ儀ニ付出水地頭談

合役へ申達ス

正月十九日

一即今上方表違変到来、御手当向ニ付、西目惣督島津〔次〕衛門殿御滞在、御方地頭縫殿〔高橋種親〕へ御談合之上、被仰越趣致承知候、救応ニ付テハ御受ノ事御座候付、即地頭へ及示談候処、七ヶ郷中ヨリ撰挙イタシ、如命ニ小隊位御方へ宛置候様被申聞、取調置候ニ付、相次第二ハ御受ニ応援可致候間、其段可申遣旨、伊膳殿ヨリ被申付候間、此旨御報申進候、以上、

大口地頭談合役

正月十九日

木脇次郎右衛門

出水地頭談合役

川上後五右衛門殿

追テ御即答可申進ノ処、拙者事小川内・大境〔大口也〕諸所地〔同上〕形見分トシテ、被差越候、昨日罷帰、夫故及遅刻、其段ハ御容恕可給、爰許之儀、上場〔同上〕其外堅場所余多有之、殊ニ小人数ノ上、勞郷ニテ、乍漸人賦イタシ候事御座候間、左様得御意可給候、

八二八 日州旧幕領ノ年貢米千三拾石処分方ノ指

揮請ヘル書

八二八ノ
正月二十日

一米千三十石

右は日州是迄之賊領之儀は、初発より何角手を付置候処、延岡・高鍋・飢肥三藩預は、夫々之取締迄ニテ、年貢米等は取束、矢張賊方江差送、尤初納之由、右等之儀迄探索之折柄、佐土原藩中軍賦掛山之内仲兵衛、当所江差越、穂北之庄屋原田俊三等、此程より帰順隨從之者ニテ、当国五郡村々去卯秋、年貢米当町木綿屋好助方蔵詰相成居候旨、別紙之通申出候付、右者共兩人即召列致參着候付、何様取計可然哉之旨、申出趣有之、致吟味候処、逆賊之モノハ何物ニモ、何れ其俣召置候誤無之、況皇土之年貢大切之事故、直様仲兵衛ハ勿論出兵高岡役々江申達、取押之手筈いたし、木綿屋方江形行得と申論、此上は朝廷江献貢勿論ニテ、逆賊江差送儀決て有之間敷、尤此方利得ニいたす儀ニテは、曾て無之旨致理解、猶又此節被相抱候河野正三郎相糺候処、五郡年貢千石欠米三十石ニテ、当所より大坂廻米之節、近村は取揃之賦ニテ、当分蔵詰は八百三十七石余候段、別紙之通申出

明治元年(1868)

候付、此貢米延岡等之三藩其外江も、薩州江引合無之候て、相渡儀不相成段申達候処、当人方ニも受合ニて、若無理ニ押取者も候ハ、当所在陣中は無申迄、陣払後迎も持運人夫等扣置、佐土原迄急飛脚を以、御注進可申越旨、承諾いたし候、且又銀納之儀共相糺候処、是亦俊三等別紙之通申出候付、未進銀之儀は同人方江預置、追て此方可得差図旨相達置、初納等金子最早三藩江相受取居候付ては、先夫形に召置申候、就ては御差図も不奉得、右様之次第奉恐入候得共、往反間後れ相成差掛之事故、右之通取計申候、別紙三通相添、此旨各方迄申越候間被申上、此末之処何方早目ニ御差図被成下候様、御取計給度、為其高岡迄飛脚差立、同所より太郎次を以形行申上候、以上、

辰正月廿日

安藤作之丞

柴山龍五郎

鳥丸六左衛門

奥掛

書役衆

八二八ノ二
正月二十日

一米千石

外三拾石欠米

ノ千三十石

内八百三十七石九斗五合

此分御料所四郡ヨリ相納候分

当方蔵詰相成居申候

百九十二石九升五合

是ハ当細野郡之分例年

船積之節差出候分

右之通御座候、以上、

正月廿日

河野正太郎

八二八ノ三
明治元年一月十七日

米良周平外三人ヨリ佐土原役人へ書状

一御米千三拾石

右ハ御料所五郡村々、去卯江戸御廻米書面之通、細

島町木綿屋好助方蔵詰ニ相成居申候、此段御届奉申

上候、以上、

辰正月十七日

米良周平

米良富次郎

吉野厚太郎
原田俊三
佐土原様
御役人中様

八二八ノ四
正月十九日

覚

一金七千兩程

日向五郡中

内二千四百兩位高鍋預所江、千九百兩程ハ、十月・

十一月・十二月迄高鍋江相納申候、残五百兩来ル二

月上旬、皆納可致筈御座候、

二千三百兩位

延岡御預所江

右同断ニ御座候、

二千三百兩位

飮肥御預所江

右同断ニ御座候、

右八日向国御料所五郡村々、去卯ノ御年貢銀凡大積

ニ御座候、尤去十月ヨリ十二月迄凡五千七百兩程、三

藩御預所江相納申候、残千三百兩程、来二月上旬ニ

皆納可仕分ニ御座候、此段御内々奉申上候、以上、

辰正月十九日

原田俊三

吉野厚太郎
米良富二郎
米良周平

佐土原様
御役人中様

八一九 豊前四日市ニ浪士押寄放火乱妨ニ付安藤

作之丞外二名ヨリ奥掛書役衆へ申報ス

正月

豊前四日市陳屋浪士体三百人余押寄、放火いたし候段、
御抱之河野正三郎別紙之通申出、猶又細々相糺候処、

右人数は決て長州奇兵隊にては有之間敷哉之風聞、乍

然昨日は勿論、委敷義不相分、昨十九日(宮崎日向市)富高陣屋にて

承候由ニ付、猶又彼地其外之義共手を付、早々申出候

様相達置申候処、今朝同人参り、富高出張延岡役人咄

ニ、高鍋等より薩州江使節等被差出候哉ニ候得共、延

岡之儀は御譜代之訳ニも候得は、其儀も如何にて、役

人共大心配之段承居候付、同人自己之間周旋にて、延

岡家老方江差越、最早延岡之大事、前後旦夕ニ相迫り

候付ては、如何之御了管^{〔應〕}ニ候哉、早く御決着無之候てハ、決して不相濟訊致説得候ては、何様可有之哉之趣申出候付、表通之使節ニ候得は、一通之儀にては相濟間敷候得共、正三郎自己之周旋ニ付ては、廉立候儀も無之、於彼方も火の付勢ニ狐疑之砌、幸之儀も可有之時宜ニ寄、此御方江御依頼も候は、何欵慥成印を御差出可相成哉之趣共、程能申論候様種々相教、今日早々出立候様申付候、返くも此方より、態と差越候儀にては無之候間、其通相合候様、相達置申候、此段別紙相添、早々各方迄申越候条、被申上候儀共宜敷御取計可給、猶模様次第、申越候様可致候、以上、

細島在陣

日付ナシ、廿日ナルヘシ

安藤 作之丞

柴山 龍五郎

烏丸 六左衛門

奥掛

書役衆

二白、兵隊之儀は、無油断嚴重夜廻斥候等、致指揮候付、此段も為御心得申越候、

【参照一】

〔慶明雜録にて校訂〕

復古記花山一件記備後以下口書節録

明治元年正月二十日

去秋来、豊前宇佐浪士下村次郎太・豊後佐伯浪士青木猛彦等馬關ニ至リ、報國隊^{〔長府藩隊名〕}寄食ノ筑前浪士藤林六郎、及ヒ佐田内記兵衛・小川潜蔵等ト俱ニ、同志ヲ募リ、花山院家理^{〔時ニ罪アリ、河内ニ潜居ス〕}ヲ迎へ、兵ヲ挙ケ、九州旧幕領ヲ領略センコトヲ謀ル、次郎太・猛彦及ヒ山口兵部^{〔碩太郎〕}、京ニ詣リ澤為量雜掌兒島備後ニ介シ、家理ニ説ク、十二月十日備後ト俱ニ家理ヲ奉シ、周防大島郡久賀ニ至ル、革新ノ報ヲ得ルニ及ンテ、備後再ヒ京ニ入り、三條公ニ就テ家理ニ征西ノ朝命ヲ下サンコトヲ請フ、許サレス、正月六日家理ヲシテ帰京セシメ、及ヒ糾合ノ徒、亦入京従事スヘキノ論ヲ承リ、初メ次郎太ノ京ニ赴ク、浪士宇佐野次郎^{〔天田忠〕}・大島捨之助^{〔田村小次郎〕}・島田唯作^{〔竜恩〕}モ亦、長崎ニ赴キ器機ヲ購フ、十二月五日浪士結城小太郎・本田忠太・松本太五郎・松浦次郎・吉見甚三郎・秋月五郎^{〔元中村威之助ト称ス、天章ノ庄屋ナリ、此者嚮導タリ〕}・蜂須新之助^{〔薩藩菊地謙之助ト稱ス、從僕〕}等ト、天草代官所ヲ襲ヒ、数人ヲ斬リ金八千余円ヲ奪ヒ、火ヲ近傍ニ放チ、長崎ニ帰り、金ノ半ヲ結城小太郎ニ付シ、器械ノ資トシ、其半ヲ齎シ、馬關ニ帰ル、正月藤林六

郎・若月隼人報國隊士、及ヒ佐田内記兵衛等ヲ遣リ、十四日四日市代官所ヲ鹵掠ス、捨之助・唯作(梅須家地)・新之助及ヒ宇佐野次郎・山本土佐ハ、久賀ニ赴キ家理ヲ迎フ、家理備後ノ報ヲ待タス、俱ニ室積ニ到ル、沿道往々暴威ヲ振フ、又遊蕩ヲ為スモノアリ、廿日備後京ヨリ至リ、室積ニ追及フ、兵部ヲ併セテ七人、遂ニ皆捕ヘラル、次郎太・猛彦ハ遁去ル、

【参照二】

花山院一件記他

○花山院一件記ニ云、花山院家理卿へ随從ノ暴徒、速ニ御引渡之儀、精々申入候得共、終ニ御承引無之、廿日七ツ時断然御渡不被成段、御決答ニ付、不得止御旅宿へ差迫候処、一同短銃ヲ構ヘ手向候付、從是モ少々及砲発、無難暴徒召捕申候、家理卿ノ儀ハ、聊御怪我モ無之、早速御介抱申上、一応専光寺へ御立除、御附尾崎山城・佐々木舍人相添、岩田村郷士國光武右衛門方へ御引移相濟候、

【参照三】

○長崎縣記ニ云、天草島之儀ニ付、兒玉備後之介・結城下総之介ヨリ、土州佐々木三四郎外二人へノ飛札到

来、同島混雜之儀有之ニ付、薩州ヨリ兵士一小隊差遣、薩州野村宗七、土州吉井源馬、大村松田次郎兵衛、緒方久藏、地下定役久保山寛三・尾上與一郎出張、

【参照四】

○天草事記ニ云、正月廿三日結城下総之介・兒玉備後之介、土地引払出帆、

【参照五】

明治元年正月二十日

答書

御札致拜見候、然ハ去ル十八日御出張之処、私共一応之御面会モ不致逃去、尔後五領迄迄農兵ヲ集メ、交戦之用意專之由御承知、実ハ無名之儀有之候得共、好戦之儀無是非儀ニ付、御地へ押寄候状、貴所様方ヨリ煩無之候土地へ御出張、交戦可致哉、戦地之儀可相望、尤其御陣屋並ニ近辺へ打捨有之候大砲・ゲベル・葉等之軍器、必用ニモ可有之、其外雜具等ニ至ル迄、聊無違乱御渡可被成間、決定之上可及御報旨、御紙面之趣承知仕候、右ハ如何之御聞込ニ候哉、御地陣屋之義ハ、平日不要害之場所ニモ有之、兼テ陣屋場所替之積ニ付、追々取片付置、然処去ル十八日御先触モ無之、数十人

之渡海有之旨風聞ニ付、若哉不意之義有之候テハ、纔之農兵迎モ防禦モ六ヶ敷、幸ヒ出立仕候義ニ御座候、且此度

皇朝御一新ニ付、

花山院様九州為御鎮撫

御内勅、豊州へ渡御被遊御憂念、依之貴所様方人心一致、居合之基本モ相立度、諭達方トシテ御出張被成候段、委細村々へ御達之趣届出、承知罷在候義ニテ、右ニ付好戦之存寄無之、且農兵之儀ハ、是迄附属罷在候上、非常備之タメ、召連候迄ニ御座候、且武器之儀、好戦之存寄無御座ニ付、御預ケ申上置候、尤右之趣ハ、早速治部右衛門方へ申遣置、否之儀猶可申越儀ト奉存候、此段御報迄如此御座候、以上、

正月廿日

志賀又四郎

大羽英二郎

鈴木悟三

村田覺左衛門

結城下総之介様

兒玉備後之介様

長崎県記

【参照六】

明治元年正月二十日

富岡僚吏ニ贈ル書

一以飛札申入候、拙者共、去ル十八日〔熊本縣〕富岡出張致候処、各一応之応接ニモ不及致逃去、尔後五領辺相匿レ、当郡農兵ヲ集メ、交戦之用意専之由致承知候、実ハ無名之儀ニ有之候得共、好戦之様子無是非儀ニ付、当所へ押寄候欵、此方ヨリ人民煩無之土地へ出張、交戦可致哉、戦地之儀ハ可被任望候、尤当陣屋並ニ近辺へ打捨有之候大砲一挺・ゲベル十挺・葉等之軍器ハ、必用ニモ可有之、其外雑具等ニ至迄、聊無違乱相渡可申候、早々決議之上可被返答候、頓首、

正月十九日

兒玉備後之介

結城下総之介

富岡逃去

役人中

長崎県記

【参照七】

明治元年正月二十日

長崎會議所ニ贈ル書

以飛札得貴意候、方今

皇朝一新、拒

王命候逆徒、天誅ニ漏レ候ハ、深

花公之御憂念ニ候、

總シテ天草ハ逆徒巢穴之地、尤苛政之甚敷処、臣等不

肖不顧微賤之身、辱奉 花公之証書戮力決進、昨十八

日天草渡海イタシ、不差置逆徒ヲ攘ヒ、姦人ヲ退ケ、

一時窮民之塗炭ヲ救候ハ、聊奉報 花公之眷恩候処、

奪掠等之所存ニハ毛頭無御座候、依之此後土地鎮撫、

人心折合等之処置、仰貴藩正義之御応援処ニ候、早々

御人数等被差向、哀レ從來之苛政ヲ除キ、下民安堵之

御処置被下置候ハ、無此上大慶ニ候、早々御応援之

程所希候、此段以飛札如斯御座候、恐々謹言、

正月十九日

兄玉備後之介

結城下総之介

佐々木三四郎様

大山壮太郎様

吉井源馬様

今般

花山院殿前三位中将家理卿被奉

内勅、議奏・伝奏御兩役衆御議論之上、豊州へ被遊御

下向、随テ拙者共天草被命発途之儀、及一掃候、乍然

跡鎮撫方等之儀ハ、尊藩始薩州・大村・平戸其外勤王

之輩、精々御隔意無御座様、御熟談之上、早々御人数

等御差向被下度、委細ハ讓本文、此段別紙得御意候処、

如斯御座候、早々頓首、

正月

兄玉備後之介

結城下総之介

佐々木三四郎様

大山壮太郎様

吉井源馬様

長崎県記

【参照八】

明治元年正月二十日

肥後藩士ニ贈ル書

以飛札得御意候、

今般

皇朝御一新ニ付、九州為鎮撫、

花山院前三位中将殿被奉

内勅、豊州へ渡御被遊、就テハ兼テ当島人心不居合之

趣、被致伝聞候ニ付、諭達方致候様被命、今日富岡へ

出張仕候処、詰合之役人共、如何相心得候哉、先刻不
残引払候由、尤他藩ト交戦等之存念ハ毛頭無御座、全
右之意趣ニ御座候、貴藩ヘハ兼テ当島為警衛、御人数
モ被差出候事故、俱ニ鎮撫方御談判申度候、此段貴報
可被下候、頓首、

正月十八日

兒玉備後之介

結城下総之介

肥後御出張

御役人衆

長崎県記

【参照九】

明治元年正月二十日

十八日浪徒天草ニ於テ布告

今般

皇朝御一新ニ付、

花山院前三位中将家理卿、九州為鎮撫、

被奉

内勅、豊州へ渡御被遊、就テハ当島兼テ人心不居合、
内々混雑之趣モ相達、深被遊御憂念候、依之拙者共人
心一致、居合之基本モ相立度、諭達方トシテ出張致候、

決シテ魚暴輕拳之儀無之候間、安心致、郡中役人共一
同、集会之上決議、聊奉報
天恩度存念ニ候、異心無之面々、早々受書可被差出候、
以上、

【参照十】

明治元年正月

長崎県記

木下俊愿家記ニ云、檄文中二十日戴ル兒玉備後等之檄文ヲ指ス花山院様之真
偽相弁兼候ニ付、御許山ヨリ二十町内外、山野続ノ小
林内之儀ニテ、浪士ヨリ驅使被致様子ニ付、右村中之
者へ内々申合、探索之手筈仕リ、猶又居城ヨリ三里位、
御許山ヨリ一里余之領邑中迄、正月二十五日騎士十六人・
步卒二十人程引卒、窃ニ出張為致候処、其前夕ヨリ夜
ニ掛ケ、長州ヨリ兵隊差向、右浪士ト御許山上ニテ、
暫時銃戦、浪士尽敗舐逃散致候、依之別段出兵等不仕
鎮静仕候、

八二〇 各国公使ノ神戸事件ニ対スル要求ヲ容レ

ルコトヲ各国公使及ヒ池田茂政ニ伝フ

明治元年正月二十日

備前藩へ達書

日置帯刀(忠尚)

右者上京候ハ、其屋敷へ預り置、直ニ相届可申出事、

池田章政家記

春嶽私記

明治元年正月二十日

春嶽公私記ニ云、十九日、議事ハ外国事務總督豫州老侯、同掛り後藤象二郎大坂ヨリ上京、外国応接之次第申上タルニ就テナリ、応接ニ相成起原ハ、去ル十一日備前之人数、兵庫ニ至ル途中、神戸村ニテ英人ト取合ヒ出来、佛・亜ノ人数モ繰出、救援及砲戰、互ニ少々之殺傷有之ニ付テナリ、外国公使共ヨリ此度事勢變革ニ付、外国へ御布告之儀ハ致承知候由、乍併備前取合之一件、公正之御裁決ニ無之テハ、和親之約ハ難致トノ趣ニ付、東久世殿ヨリ裁決ハ如何様ニイタシ、列国公使満足ナルベシヤト被申処、返輸之要旨ハ 御門陛下十分ニ詫タル書面ニテ、今後之処急度為致間敷ト、請合之段申来候ハ、本国へ可申遣旨、又及暴行候様

差図イタシタル役人ハ、外国人之見ル前ニテ、刑罪ニ行ヒ候様トノ二件ナリ、此返答二十二日迄ニ可有之趣ヲ申越タリ、此段於議事席豫老侯・象二郎ヨリ總裁官へ申上、夫ヨリ公使ヨリ之來書翻訳セシヲ、上参与・公卿ノ内ニテ、高声ニ被読上、夫ヨリ下参与之面々、一人ツ、列ヲ進ミ意見及言上処、何モ大同小異ニテ、歸スル所、万国之公法ニ被任ヨリ外、無之トノ趣意ナリ、夫ヨリ公卿・議定・参与衆之評議ニ相成処、或ハ姑息、或ハ利害、或ハ蒙昧說等ニテ、更ニ不相決、下参与ハ及退席、堂上方之論ニ時刻ヲ経テ不決ニ付、下参与再出、屢々及催促処、岩倉殿ヨリ堂上方一人ツ、質問ニテ、漸クニシテ決シ、下参与へハ何レモ建議之通り、万国之公法ニ被任段被申聞、已ニ決議ニテ、片時モ早ク坂地へ可申越トノ事ニ相成処、公帥宮迄御申達有之ハ、外国交際ニ付、日本人之刑戮、御親政後御手始之事候得ハ、御奏聞ノ上、御取計ヒニ不相成候半テハ、備藩之屈服如何可有之哉ト、御申入ニ付、子半刻頃三條中納言殿(実美)・中御門中納言殿(經之) 朝ニテ、御奏聞有之、 叡裁之上、直様外国事務總督ヨリ、外国公使希望之通御処決ニ相成段、兵庫出張之東久世殿

迄、急飛脚ヲ以被申達、此度之事ハ軍隊ニ起リシ故、
償金ニテハ難贖由ナリ、備前侯モシ奉 命無之候得ハ、
御征討之御含ニ有之、且又 朝裁之趣、日本全国へ御
布告ニ相成トノ御評議ナリキ、翌二十日於太政官、備
前重役御呼出御達ニ相成タリ、

八二一 各国公使ニ中外局立ノ要求ヲ移牒

明治元年正月二十一日、各国公使ニ中外局立ノ要求ヲ移
牒セラル、

外国事務総督東久世通禧、佛・英・伊・李・蘭・米六
国公使ニ移書シ、其国人之兵器・船艦ヲ、徳川慶喜及
ヒ其臣属ニ販売貸与スルヲ禁ス、

以手紙致啓上候、然ハ今般徳川慶喜致反逆候ニ付、
(嘉彰親王)
仁和寺ニ品親王へ征討將軍被

命、征討相成居候、右ニ付貴国政府ニ於テハ、何方
ニモ偏頗無之筈ニ付、徳川慶喜又ハ其命ヲ承ル大名
之兵卒ヲ運送シ、又ハ、武器軍艦ヲ輸入シ、又ハ貴
国之指揮官兵卒ヲ貸ス之類、総テ彼之兵力ヲ助候儀
有之間敷候間、此旨各国臣民へ御申達被下、其政府

ヨリ御取締可被下候、此段御掛合申入候、以上、

正月二十一日 東久世前少将

各国公使各通

外務省記

各国公使ノ回答原記ヲ佚ス、但局外中立之布告ハ、廿五
日ニ在リ、

【参照一】

明治元年正月二十一日

米国公使館書記官アルセ・ホルトメン、書ヲ徳川慶喜
ニ致シ、討薩表^{三日}ヲ得テ、之ヲ本国政府ニ報セント
請フ、是日之ヲ贈ル、

千八百六十八年二月十四日^{正月二日}、江戸ニアル合

衆国公使館於テ

江戸ニアル御老中閣下ニ呈ス、

余聞ク、本月三日、大君之名代人瀧川播磨守、京都ニ

出立セル時、此都及ヒ其他之地ニ於テ、薩摩公ノ罪条
ヲ記シタル書翰ヲ持チ行タリ、余願クハ、閣下余ニ其
書翰ノ写ヲ恵ミ、余ヲシテ合衆国政府ニ報告スルヲ得
セシメン事ヲ、恐惶謹言、

アルセ・ホルトメン手記

【参照二】

明治元年正月二十二日

答書

御書状致披見候、然レハ我本月三日、瀧川播磨守上京之節、持参イタシ候松平修理大夫罪条之儀ニ付、大君ヨリ

御門へ御奏聞相成候ケ条書写、御一見被成度旨、御申越之趣致承知候、則別紙写二通差進申候、此段拙者共ヨリ御報可申進旨、小笠原壹岐守被申聞候、右可得御意、如斯御座候、以上、

正月廿二日

[A. L. C. Portman]
アルセ・ホルトメン様

外務省記

外務省記

明治元年正月廿一日、議定議事規程ヲ達セララル、

一 毎日巳之刻出勤、申刻退出、

一 一・六之日休、

一 議事之体、総裁を始下参与迄、総て出席無之向は不

相預、次官ニて可決事、

一 毎日巳之半刻より、議事相始可申事、

右之通、総裁官被

命候、仍申入候也、

正月廿一日、

博房(万里小路)

(徳川慶勝)
尾張大納言殿

(松平慶永)
越前宰相殿

(山之内豊信)
土佐前少将殿

(島津忠義)
薩摩少将殿

(後野茂麿)
安藝少将殿

(伊達宗城)
宇和島少将殿

(護久)
細川右京大夫殿

(記) 万里小路参与制度事務総督タリ、議定各藩侯召

集、掌務ノ規定ヲ通シタルナリ、

八三三 議定議事規程ノ達

八二三 松方正義ヨリ桂久武へ長崎奉行所処分ノ

顛末報告

明治元年一月廿二日、松方助左衛門^義、長崎奉行所処分ノ顛末ヲ藩老ニ報セリ、

御勇健御繁務可被為成御座候半、奉恐悅候、追々大勝利之御吉左右、且

御勅書御頂戴之御儀共奉拝承、万々恐悅此御事ニ奉存上候、偕当地形勢鎮台脱走後、直ニ西役所を會議所と相唱へ、各藩毎日出会尽衆議、第一外国交際、第二当地鎮撫方精々取付、追々形行之書附等、御屋敷方江差出置申候間、疾ニ御詳達被下候由、外国交際之事件は、各国談判運上所ニおゐて、態々肥前・筑前之間役を据へ、土藩と私出て、コンシユルと談判相濟、少々佛國ハ異論も有之候得共、終ニ承服ニ相成、何偏此已前通運上銀等も相納る事ニ御座候、孰れ不遠、何と欽朝命可相下ル、夫迄は何も変革不致賦、指掛難被捨置事件、不得止義而已尽衆議取扱致す筈、是非御沙汰有之迄は、一人之罪人無之様ニと、精々心掛候得共、去ル十四日晚、鎮台脱走之混雜之勢ひニ乘し、

強盜有之、是れハ遊撃隊中之者ニて、召捕相成候処、当人より割腹御断申出、尤隊中は勿論、土地之役人も一同死罪と一決し、不得止隊中江曳渡し、割腹為致申候、誠ニ殘心不尠候、為外ニは波平と申所江、同所庄屋江不服ニて、強訴等も有之、糺方ニ相成候処、全く庄屋之私欲ニ出る事、其外何分変態之折柄故、何にかにと御座候、

○一段之動揺は勿論、外国人杯ニ至る迄、不一方混雜御察可被下候、乍去鎮台曳取會議所相立候と、直ニ御金八千両・御米一万俵余を市中人別ニ分配し、頂戴相成候様、土藩と談し、其通相成候処、市中是ニて安堵之廉相見得、先々今通なれば静謐模様ニて、御國徳難有がり候寄ニ追々被中間候、御安心可被下候、

○当地一体御所置振り、如何様思召之程も不奉承知、唯々差掛之愚考尽し、愚昧之一張を勤度存詰候処、一昨日汾陽帰崎相成、御趣意之程も篤と奉承知、頓と安心仕、難有事ニ奉存候、

○諸藩人数も

御勅書一同拜見相成候処、土・藝・大村之面々、同慶此事ニ御座候、判然たる御報知初て承知仕、誠ニ難有、

愉快之御事ニ御座候、もふハ唐津藩之所同席いたす訳、更ニ無之候付、即日退座相達、当今国元へ飛脚等あちこちにて、大恐怖之姿ニ被聞候、自然何と軟わび事ニ相成可申軟、夫とても確拠を得てなれハ、不相濟訳筋ニ御座候、江戸之次第ハ、全く壹岐之断ニ出る事ハ、判然たる義にて候半、実ニ南部彌八郎磔ニ相掛候新聞も有之、遺恨千万不堪次第御座候、当地病院諸生ニ、江戸より参り居、大きに驚き居候様子なれと、纒ニ一二之諸生如を、決して恨るにあらず、勤て篤を尽し返度者ニ、各藩談合致し置候処、自身より近日逃去候様ニ候、

○島原ニハ此内より有志之者有之、京御屋敷江も参候段も承り居候処、いよ／＼其向ニ被聞、昨日は島原聞役より申出候ニは、弊国ニおゐては、主人旧將軍と兄弟之間にて、諸藩御疑も御尤ニ候得共、近日重役之者、国元より出て、国論申上る賦ニ御座候間、どふぞ夫迄ハ御指支無之候ハ、御末席ニ加り度との事故、右様之訳合なれハ、今形にて可然と、一同衆議相決シ申候、
○佐賀ハ何も異論一点無之、会議所相立候後、直ニ添島（副島種臣）次郎と申、佐賀にて一人の勤 王家を聞役ニ撰挙シ、

差出申候、（編島齊正）閑叟之相廻り、誠ニ早き者ニ御座候、御察可被下候、

○天草江浪人共三十人余り、当地より渡り越、既ニ色々混乱之様子、右は花山院之宮様

御内勅を奉シ、天草之奸を除き、土民安堵を所置す、薩・土・大村之兵江宜頼と、土藩江申越候書通有之、当今ニ至り、浪士杯江

御内勅と申て、夢ニも有之間敷、定て例之偽ニ可有哉と愚考仕候、此段ハ京師江窺越申賦、乍然右事件ニ就ては、其假打捨置と申訳も無之、孰軟何ぞ捨置、鎮撫方專要、即日軍兵繰出シ、万一承服不致節は、打破るニ外なしと衆議一決し、私ニは態と最初は黙し罷在候得共、天草之儀ハ、肥後より御警衛と軟承る事故、肥藩より御鎮撫有之当然之事と、勤て肥後江論シ掛候得共、何分請合ハ不出来と申事ニ御座候、然処土藩佐々木より私を呼出し、孰軟薩ならてハ、天草之儀は六ヶ敷、却て混雑を醸し出し候義も難計と内証承り、実ハ望所之幸と存候得共、一往ハ衆議の上ならされハ、指出す義無之、御方より一同江御議論相成候ハ、何様とも可致申答置候処、各藩之人数薩江相頼と申事にて、

即座ニ請合、私ニも参り度論シ候得共、冲上京ニ付て、ハ、最初より談し候は無之候付、残り呉候様佐々木より承り、乍残心止り申候、人数茂木迄出立相成候当日故、直ニ退座致し、野村宗七同道ニて、茂木迄罷越、澁谷彦助(長崎市)一小隊、夫れニ本田奎兵衛監軍之賦ニて、今朝渡海相成申候、澁谷一小隊丈ハ、先ツ此涯天草鎮撫として、同所江被召置度賦ニ、澁谷江談し置申候、肥後は請合不出来、実ニ好機會ニ御座候、肥後より二三百人は繰出し候哉ニ、茂木ニおゐて風評承り、若や混雑之儀も有之候ハ、報知次第、是非私ニも天草江参る賦ニ、澁谷江内談致置申候、何卒此地之土民安堵いたし、人心承服するを以、上策と愚考仕候、外国交際之談判、一先ツ各国相濟候付、旁之御届ニ會議所より藝藩・大村藩・佐賀藩、及御屋敷よりハ冲直次郎、昨日急ニて上京仕候、近々船便無之、陸行ニ相成申候、

○土地之役人ともは、一同愉快之長崎と相成候と、大きに悦び居候、市中も当今ニ至り、頓と安堵の姿ニ御座候、乍然是迄旧藩江相付、奸を計ひ候者共ハ、心世話ニ有之様子ニて、隠ニて色々申者も有之様子なれとも、少も無異慮寛仁大度之趣意ニて、いよく公平至当の

所置を尽し度、殊ニ未

朝命も不被為在候得は、何分人氣を得るを以、上策と不及ながら愚考仕候、誠ニ当地之義、鎖したる土地ニは候得共、第一外国交際之大事件有之、実ニ不容易事柄而已、二ニ土地之人氣も不宣、町人勝ニて、実ニ私式不調法者、殊更当地之初職ニも無之ニ恐入候得共、臣子の分と心得、不辭一張相勤申候、最初之賦より日延不計も相成恐入候得共、何分宜様御賢慮を以奉至願候、誠ニ魚毫且跡や先書綴、失敬恐多奉存候得共、御趣意御窺旁奉得貴慮度、如是御座候、恐惶敬白、

長崎より

正月廿二日

松方助左衛門

九拜

(桂久武)
右衛門様

侍史

八二四 澁谷彦助ヨリ天草浪士鎮撫ノ報告

明治元年一月廿二日、澁谷彦助安国天草浪士鎮撫之顛末ヲ藩ニ報セリ、

一私共三小隊之儀逆風ニ逢、乍漸去ル十七日、茂木浦江

致着、当所役所陣營ニて、同日長崎御邸内江致着候処、

去ル廿日夜、本田李兵衛着いたし、上京被仰付候御書

付相達、翌日式隊召列、茂木浦迄出張相待候央ニ、野

村宗七・松方助左衛門・本田李兵衛馳付、致承知候趣

は、天草表浪士共乱妨之哉ニ相聞得、矢張豊後日田表

辺より諸所踏入、疾ニ同所代官久保田次部右衛門逃去

り候由、右ニ付一小隊も致分隊、双方江可相分遮て承

得申候へ共、天草富岡ハ爰許より纔七里位も有之、一

同走入当所致鎮撫、夫より上京可然と一決いたし、昨

廿一日天草城下富岡江致出兵候処、浪士本陣江四拾人

位も入込、皆共兵隊之形ニて、私共行軍ニて、市中会

所双方江建付、則会所江頭取之者召呼、各方何様之心

組ニて、当所江走入候哉と及札問候処、花山前三位公

豊後日田迄御下向相成、今般

皇国一新ニハ、九州為鎮撫方渡御ニ付、御同人之就命

当所江出張、旧幕役人共江面会之賦ニ候処、皆共逃去、

却て土民方動揺いたし、鎮撫共不相調向ニ成立候ニ付、

長崎各藩御出会中江相聞候様取計、此上は何様共可奉

畏、則本陣御引渡可申と申述、無異議降伏御座候、右

ニ付益滿新之丞事、御兵具方一小隊召列、豊後日田江

走向出帆御座候、左候て跡一小隊は天草中人心居合迄、

為鎮撫方不残居候て不叶時宜ニ成立、勿論大庄屋共よ

り、此末万端御指揮被成下度申出、引払難申、兎角此

末之所置肝要ニ御座候間、爰許江滞陣可仕哉、何分被

仰渡度奉存候、

一当所在村江、此内より肥後出軍相成、早速々々出会可

給旨、及掛合置候、

一当所より五六里之村江、農兵群集之由、是以頭取之者

共、可罷出旨申伝置候、

一当所代官出張所本陣相構え、薩州陣營と標札打置申候、

一土州藩式人・大村式人、長崎より案内として被差遣候

得共、当分却て邪魔罷成申候、

一長崎御附人江ハ本田李兵衛連名ニて、別段御届申出置

候、

結城下総之介

兒玉備後之介

本筑前介
茂太郎事

右式人頭取ニて、面会之上初て相分候、

一当所旧冬十二月五日、役所焼打ニテ金子盜取候者は、

右之者共江皆共不審相掛居候、右之者共小銃幾許所持居候間、取揚置候、

右之通形行早々御届申上候、已上、

正月廿二日夜

天草富岡滞陣

八四ノ一
正月廿二日

一太政官代へ出席、遷都ノ一条廣澤・後藤談合、明日議事ノ筈候事、今日岸良入来、

八二五 大宮御所造立入用金割付

八五ノ一
申達

大宮御所新規御造立相成候ニ付、右御普請御入用、御料所万石以上領分・寺社領へ国役割被 仰付、村高百石ニ付、金三分之割ヲ以、

御料ハ御代官御預所、私領ハ領主ニテ取立、可相納旨被

仰出候付、拝領高並込高改出新田高共、巨細別紙案文

之通相認、来ル廿日迄之内、町奉行所内 御所御用取扱所へ可被差出候、

右国役金懸改之儀ハ為替御用達、別紙名面ノ者へ申渡候間、案文之通相心得、右御用達之内へ、金子引渡相

濟候ハ、請取手形相添、納定日前同所へ可被差出候、右ハ大久保主膳正・小栗下総守申達之、

〔政事〕
〔忠告〕
参与衆御役所ヨリ、別紙之通申參候ニ付、右一通致回達候、御留ヨリ御返却可被下候、以上、

紀伊中納言内

中島三郎右衛門

正月廿三日

大橋左衛門

横井次大夫

御名

外略ス

(別紙案文)

上納申金子之事

金何程

右ハ今般

大宮御所御造立御入用国役金、高百石ニ付金三分之割

合ヲ以、可相納旨被

仰出候付、領分村々ヨリ取立、書面之通り上納申處、仍如件、

何之誰家来

年号月日

何之誰印

御勘定所

名前書

為替三井組

三井三郎助

三井次郎左衛門

三井元之助

為替十人組

竹川彦太郎

荒木伊左衛門

奥田仁左衛門

島田八郎左衛門

小野善助

右之通ニ有之候、

卯十月

大宮御所御造立ニ付、国役金上納日限左之通、

毎月

朔日 六日 十一日
十六日 廿一日 廿六日

拝領高何程

一村高何程

何之誰領分

何国村々

但天保度御改之後増減有無

高何程

無地高・永荒・穢多

畑亡高並欠減地田方

五分以上荒免除共

但高百石ニ付
金三分ノ、

残

懸高何程

此国役金何程

内訳

何国何郡

一村高何程

何村

但天保度御改之後増減有無

田高何程

内荒田高何程

但何分何厘何毛ニ当

高何程

無地高

明治元年(1868)

高何程

永荒引

高何程

穢多烟亡高

印

印

村高内訳等、急速巨細取調難出来分ハ、合高凡ニモ取調、日限通可被差出、且本紙之儀ハ、美濃紙立帳

二相認候事、

何之誰領分

何郡村高内役金取調申上候書付

何之誰家来

何之誰

拜領高何程

何之誰領分

一村高何程

何郡村々

内

高何程

無地高其外云々、跡引
園方五分以上荒地免除

残

高何程

掛高

此国役金

但百五ニ付、
金三分ツ、

内訳

一村高何程

何国何郡何村

但天保度御改之節村高何程之処、其後新田高何程相増

内

高何程

無地高其外云々跡引

但無地高其外等之跡引有之候分ハ、左之通相認候事、

田高何程

内 内荒田高何程 但何分何厘何毛ニ当ル

畑高何程

但田方五分以上之荒地有之分ハ、左之通相認、

其余ハ田畑高内余相認候ニ不及候事、

何国何郡

村高何程

何村

但右同断之節、書出候後増減無御座候、

内訳同断

右之通御座候、

何之誰家来

年月日

何之誰印

別紙之通筑前宰相様衆ヨリ相達候付、本書ハ伊賀中将

様衆へ順達仕候ニ付、写相添此段申上候、以上、

辰正月廿四日

新納嘉藤(立卷)一

園山(金)三
糺様

八五ノ一

准后新殿御造立ニ付、昨年中被

仰出候国役金不納之向ハ、来ル二月中限り、金穀御役

所へ上納可有之事、

右之通可相違旨、参与衆被申渡候、仍申入候也、

参与

正月

役所

証

一金五千四百七拾一兩貳分三朱卜

銀三匁五分五厘六毛

右ハ

大宮御所御造立ニ付、国役金書面之通請取申^(候脱力)処、仍如

件、

會計事務局

慶應四年辰二月

役所印

薩摩少将

御証書一通

但

大宮御所御造立ニ付、御国役御上納被成候付、

御用掛

木村東市正

右ハ太政官代金穀御役所へ罷出、右東市正へ致面会、

御上納金差上申候処、御証書被相渡申候付、差上申候、

辰二月廿七日

赤井直之進

内田仲之助殿

右之通相勤申出候付、御証書相添此段申上候、以上、

辰二月廿七日

内田仲之助

伊勢様

八五ノ二
金五千四百七十一兩二分三朱

右ハ

大宮御所御造立御入用国役金、高百石ニ付、金三分之

割ヲ以可相納旨、別冊之通被仰渡候付、御金割之儀、

御留守居へ為致吟味候処、御高頭七十二万九千五百六

十三石六斗三升、百石ニ付金三分之割ヲ以、右之通相

及候旨申出候ニ付、其通被

仰付度、

太守様へ奉伺候処、其通被

仰出候ニ付、去ル廿七日太政官代金穀御役所へ、御留

守居附役赤井直之進罷出、御用掛木村東市正へ致面会、

御上納金差出候処、御証書被相渡候旨申出候、都テノ書付相添、此段申添候条、

中将様被達

御聴、御用人御勝手方掛へ被相達候儀ハ、何分ニモ可被取計候、以上、

辰三月八日

島津伊勢

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

金五千四百七拾一兩貳分三朱

右ハ今般

大宮御所御造立御入用国役金、高百石ニ付金三分之割ヲ以可相納旨、別冊之通被仰渡候付、御金割之義、御留守居へ為致吟味候処、御高頭七十二万九千五百六十三石六斗三升、百石ニ付金三分之割ヲ以、右之通相及候旨申出候付、其通御上納相成候様、可被仰付哉、此段奉伺候事、

金五千四百七十一兩貳分三朱

右ハ今般

大宮御所御造立御入用国役金、高百石ニ付金三分之割ヲ以、可相納旨被仰渡候付、御高頭七十二万九千五百六拾三石六斗三升、百石ニ付金三分之割ヲ以、右之通御上納相成管候付、此涯爰許へ差続候様、可取計候、此段申越候、以上、

卯十一月廿八日

島津伊勢

木場傳内殿

御本文被仰渡趣承知仕候、金五千四百七十一兩貳分三朱、今日仕出為替ヲ以、内田仲之助・新納嘉藤二へ向ケ、御続取計申候間、此段御受答申上候、以上、

卯十二月三日

木場傳内

伊勢様

八二六 寺島宗則参与兼外国事務掛トナリ兵庫ニ

派遣セラル

明治元年正月廿三日、寺島陶蔵ヲ参与兼外国事務掛ト為シ、兵庫ニ派遣セラル、

寺島陶蔵

徴士参与ヲ以テ、外国事務掛被

仰付候事、

但兵庫在留可致事、

(記) 月初大坂ニ在リ、備前藩人神戸ニテ外国人ト争闘

アリ、在邸ノ岩下・吉井等ト同所ニ赴キ、周旋スル

所アリ、茲ニ於テ此命アリシナリ、

八二七 町田久成参与兼外国事務掛トナリ長崎ニ

派遣セラル

明治元年正月二十三日、町田民部久成ヲ参与兼外国事務
掛ト為シ、長崎ニ派遣セラル、

町田民部

徴士参与ヲ以テ、外国事務掛被

仰付候事、

但長崎在留可致事、

(記) 寺島ト同シク神戸ニ勤仕セシカ、此日長崎派遣ヲ

命セラレタリ、

八二八 五代友厚参与兼外国事務掛ヲ命セラル

明治元年正月二十三日、五代才助厚女参与兼外国事務掛ヲ

命セラル、

五代才助

徴士参与ヲ以テ、外国事務掛被

仰付候事、

(記) 寺島ト同シク神戸ニ在リ、此日此命アリシナリ、

八二九 藩戦亡者追福修行ノ達

明治元年正月二十五日、藩戦亡者追福修行ヲ達セリ、

一来ル廿五日、今度戦死諸靈為追福、大施餓鬼修行仕度

旨、林光院申出、其通被仰付候条、親族之面々致参詣

候様被仰付候、此旨向々へ可申渡候、

辰正月廿三日

糺関山

(記) 林光院ハ(京野府)相國寺内ノ別院ナリ、

八三〇 西郷ヨリ大久保へ東国征討ノ追討使派遣

ニツイテノ書翰

明治元年正月二十三日、西郷東国征討ノ追討使派遣ヲ必要トスルノ趣旨ヲ、大久保ニ報セリ、
巻封

大久保一蔵様

西郷吉之助

要詞

別紙會追討之策、精微ニ取調候ものと奉存候、全体東国江ハ一人も堂上御出張無之、追討使被差向候義肝要と奉存候、仙臺一手ニ被命候共、必追討使ならてハ不叶事ニ御座候、京師より東国江ハ只今路絶候得共、外国船御借入ニて、海路より仙臺迄御廻相成候得は、無造作事ニ御座候、備前之所置さへ相濟候ハ、必外國人ハ應諾可仕事と奉存候、左候ハ、綾小路様なり共、東国之浪士を御率被為在候て、御差向相成候ハ、大ニ官軍之勢ひを張、兵氣相進可申事と奉存候、先日岩倉卿江仙臺一藩ニてハ、十分討破も可致筈御座候得共、米澤杯ハ前以より會之本国を突候策ハ相立居、殊ニ佐竹辺よりも官軍ニ趣義候ハ、段々申上居候事ニも御座候間、右両藩ハ勿論、南部迄も仙臺之応援を被命、東国之大藩官軍之色を顕し候ハ、賊巢必ス混動可致、いづれ一発なり共為致候へハ、弥官軍之腹相居候事ニ御

座候間、是非三藩江も、応援被命候様有御座度段申出置候付、此上ハ追討使被差向、東国之大藩をしつかり御はまらせられ候ハ、此上なき良策と奉存候、綾小路様ニても誰様ニても、御差向相成義ニ御座候ハ、參謀之者御撰被為在候義、肝要ニ奉存候、東国之浪士も地利国情ハ得候事ニハ候得共、格別智謀之士も無御座候付、御随從丈ハ相調可申候付、其合を以得と御申込被下候てハ、如何可有御座哉、可宜と思食され候ハ、御申入被下度奉合掌候、此旨乍略義以書中奉得御意候、頓首、

正月廿三日

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

(按)

此際東征之内議アルモ、未タ決スル所アラス、正月五日橋本参与梁実ヲシテ、東海道鎮撫總督トシ、柳原参与助前ヲ副トシテ、派遣セラレシノミ、全十五日ニ、東海・東山・北陸三道東征ノ師ヲ発スルヲ以テ、奥羽諸藩ニ命シテ、会同セシメラル、尋テ全十七日、仙臺藩ニ命シテ會津ヲ討タシメラルノミ、即チ書牘中仙臺ノミ頼ムモ、其詮ナカルベキヲ以テ、堂上ノ追討使ヲ派遣セラル、コトヲ、必要トスルノ意見ヲ表シ、其追討

使ニ綾小路前侍從ヲ推サントセリ、之レ同侍從ハ先キニ諸浪士ヲ率テ、義ヲ江・濃之間ニ唱へ、一時世間高カリシニ仍リ、西郷其為人ヲ見込ミタルモノナラン、然ルニ綾小路ハ全二十六日、終ニ京都ニ召還サル、ニ至レルナリ、

八三一 暗殺ノ嚴禁

明治元年正月二十三日比、年来人ヲ道路ニ暗殺スル者多キヲ以テ、令シテ之ヲ嚴禁セラル、

近年於処々致暗殺候内ニハ、罪状相認、死骸ニ添有之候モ不少、何レニ陰惡陰謀等ヲ憤リ候テ之所業ニ可有之、全体不埒之者共ハ、得ト吟味之上刑典ヲ以、嚴重之御裁許被

仰付事ニ付、大政御一新之折柄、猶更御為筋ヲ心懸、公然ト可申出処、其儀無之、私ニ致殺害候ハ、朝廷ヲ不憚致方ニ付、右等之者有之ニ於テハ、吟味之上屹度嚴刑ニ可被処候間、心得違無之様可致事、

(記)

中御門經之家記
戸田氏共家記

文久以降斬姦之風行ハレシヨリ、世上不穩ノ形勢ニ伴ヒ、殺伐ノ氣盛ニシテ、白昼途上斬殺ヲ憚カラサルニ至ル、其間ニ乘シ、無賴之徒、往々良民ヲ兇掠シテ、多殺ヲ誇ルノ傾キアリキ、仍テ嚴ニ之ヲ戒飭セラレタルナリ、

八三二 参与兼會計事務掛三岡公正紙幣製造ニツ

キ建白

明治元年正月二十三日、参与兼會計事務掛三岡公正(由利)、紙幣製造之議ヲ上ル、是日之ヲ可トシ、公正ヲシテ其事ヲ掌ラシメラル、

公正之建白書ハ原記ヲ佚ス、

春嶽私記ニ云、方今大政復古之運ニ向ヒシカトモ、天下多事多難ナル上ニ、

朝廷ニ金穀乏敷、民ヲ賑シ、兵ヲ出スニ由ナキ而已ナラス、殆今日之供給ニ迫レル勢故、数々濟事ノ議事アレトモ、更ニ其術ヲ得サリシニ、二十一日會計掛リ三岡八郎、日本全国之石高ニ応シ、楮幣ヲ製シ、一時之急ヲ救ヒ、十三年ノ後ヲ待テ、楮幣總テ現金ニ復歸ス

ヘキノ起法ヲ建議セリ、此法取捨之衆議、疑懼紛々トシテ両端更ニ決シ難クシテ、席ヲ竟ヘ、翌二十二日モ亦尔リ、二十三日ニ至ツテ楮幣ヲ製造アルヘキニ決シ、其主宰全權ヲ八郎ヘ命セラレタリ、

八三三 遷都ノ議決セス

正月廿三日

一太政官代出席、容堂・越公・宇和島公參仕、於上議事

所遷都ノ議言上、衆評不決、

今夜吉井入來、

八三四 朝廷ヨリ賜金ノ令達

明治元年正月二十四日、朝廷金二万兩ヲ賜ハル、

特旨ヲ以テ、島津忠義ニ金二万兩ヲ賜フ、

薩州

思召有之、金二万兩被下之候事、

正月

(記)

本日朝廷金二万兩ヲ賜ハル、長藩モ同一ナリ、先キニ會津・桑名兩藩京都守衛ノ為メ、旧幕府ヨリ江州辺ニテ数万石ヲ宛行レシカ、兩藩ノ戦勞ヲ賞セラレ、之ヲ賜フノ内命アリシモ、時會許サ、ルヲ以テ、之ヲ辞セリ、故ニ今此賜金アリシナリ、同時ニ長州・尾州・藝州・越前・土州・宇和島ニモ賜ハリタリ、其額左ニ載ス、

留守居ノ届書ヲ載ス、

御書附 一通

但

思召有之、金貳万兩被下之儀、

右ハ御用之儀有之候間、今廿四日午刻會計裁判所江、

御重役御留守居之間罷出候様、非藏人鴨脚加賀ヨリ相

達候付、私被差出候処、中御門中納言様ヨリ御別紙被

成御渡候付、可申上旨申上置候、左候テ御下渡御日限

之儀ハ、追テ可被仰出旨被仰間候、

右之通、私相勤候間、此段申上候、以上、

辰正月廿四日

新納嘉藤二

糺様

【参照一】

明治元年正月二十四日

特旨ヲ以テ、毛利敬親ニ金二万兩ヲ賜フ、

長州

思召有之、金二万兩被下之候事、

正月

島津忠義家記
筆下日記載

【参照二】

明治元年正月二十四日

特旨ヲ以テ、尾州藩主徳川徳成・雲州藩主淺野茂長・福井藩主松平茂昭・土州藩主山内豊

範・宇和島藩主伊達宗徳ニ、各一万五千兩ヲ賜フ、

各通

尾州

藝州

越前

土州

宇和島

思召有之、金一万五千兩被下之候事、

徳川徳成以下家記
春嶽私記

大久保市蔵

総裁局顧問被

仰出候事、

御書附 一通

但

大久保市蔵総裁局顧問被

仰出候儀、

右只今太政官代江可罷出旨、書記役所ヨリ御切紙ヲ以

御達ニ付、罷出候処、三條前中納言様ヨリ非蔵人吉田

遠江ヲ以、被成御渡候付、可申上旨申上置候、

右之通御留守居附勤永山左内相動申候間、写相添此段

申上候、以上、

辰正月廿四日

新納嘉藤二

札様

(按) 公記ニ拠レハ、二十七日ノ任命ニ見ユ、此日任

命アリシモ、御請ニ至ラス、二十七日ニ及ビ、始メテ

公表セラレシナルベシ、

八三五 大久保利通総裁局顧問被仰出

八三六 島津忠義英医ウイリスヲ雇フ

明治元年正月二十四日忠義公英医ウルユスヲ雇ヒ、瘡痍ヲ治セシメンコトヲ請ヒ聴サル、

此度戦争ニ付、手負ノ者夥敷御座候処、療医砲瘡未タ不精処ヨリ、追々及死亡候者不少、実ニ不被忍次第二御座候、就テハ其術ヲ究、治養方穿鑿仕候折柄、兵庫滞在英国熟練之医師頼入申度、無拠為致相談候処、人命ニ相拘候儀、不容易事候間、速ニ可差遣旨致許諾候ニ付、当邸へ召呼療治相加度御座候間、何卒入京御免被仰付被下候様、宜御執奏奉願候、以上、

正月二十四日

薩摩少将

批紙

願面之趣無余儀事故承届、往來番所ニハ可相達候得共、及遅延候ハ、其藩ヨリ直ニ相届可為致通行事、留守居之届書ヲ載ス、

御書附一通

但手負人治養英人相頼入京願之儀、

御官名

右外国事務総督三條前中納言様雜掌太田元治へ面会、急速御運ヒ相成候様、演説イタシ差出候処、慥ニ被成御落手、太政官ニヲイテ御達可被成候間、可罷出旨雜

掌同人ヲ以被仰聞候付、罷出候処、宇和島少将様ヨリ、御付紙ヲ以被成御達候間、可申上旨申上置候、

右之通御留守居付役勤永山左内相勤申候間、御付紙此段申上候、以上、

辰正月廿四日

新納嘉藤二

糺様

(記) 伏見・鳥羽・淀・八幡・橋本ノ戦傷者百余人ニ上レリ、然ルニ当時尚外科ノ術開ケス、施療之法尚内科医ノ手術ニ属スルヲ以テ、銃瘡ヲ癒スニ、尋常ノ膏藥等ヲ貼付スルニ過キス、為メニ往々膿壞、為メニ死亡スルアリ、或ハ治癒久シク、苦艱ヲ訴フルアリ、頗ル慘ヲ極ム、此ニ於テ洋医ヲ聘シテ、療術ヲ求ムルノ議トナリ、英国軍医ウルユスヲ聘スルコトヲ約シ、之ヲ朝ニ請ヒ、允裁ヲ受ケタルナリ、是レ各藩ニ先ンシ、洋医ヲ雇ヒタル始メトス、

戦争人数砲瘡療治方トシテ、先達テ英医(ウルユス)御頼入相成、此節歸庫付、御挨拶トシテ金子五百両・縮緬式反・大和錦式反御差送相成候処、此節出立ニ付テハ、兼テ御親睦殊ニ依御願、ミニストルヨリ申付ニ

マカセ差越候ニ付、自身致頂戴候訳ニ無之、金子之義ハ致返上、右端布丈ハ致頂戴候、右ニ付ミニストル方ヘハ、イツレ之筋御挨拶無之候テハ、相済マシク候付、金子差送り相請取候向ニ候ハ其通ニテ、自然不相請取候ハ、外ニ品物御見合ヲ以、於其許都合能取計相成候様、

御沙汰被為

在候付、於其許可然様御取計可被成候、此段申越候、以上、

辰二月

關山 札

滞坂

小松帯刀殿

御書附一通

但太守様被

免襖候之事、

右ハ御用有之候間、早々太政官代へ罷出候様、切紙到來、私罷出候処、長谷美濃権介様ヨリ、御別紙被成御渡候付、可申上旨申上置候、左候テ

御所並総裁宮様へ、御使ヲ以テ御礼被仰上候様、被仰聞候、

右之通私相動候間、此段申上候、以上、

辰正月廿四日

新納嘉藤二

札様

八三七 忠義公襖ヲ許サル

明治元年正月廿四日、忠義公襖ヲ着クルコトヲ許サル、

薩摩少将

自今被

免襖候事、

留守居ノ届書ヲ載ス、

八三八 勅使各国応答ニツキ評議ス

正月廿四日

一太政官代出席、勅使各国就御応答御評議有之、

鹿兒島県史料編さん関係者

顧問

聖心女子大学講師 大久保利謙

早稲田大学教授 竹内理三

学習院大学学長 兒玉幸多

東洋大学教授 沼田次郎

前東京大学教授 小西四郎

東京大学教授 山口啓二

委員

鹿兒島女子大学教授 北川鐵三

短期大学教授 桃園惠真

鹿兒島大学教授 桃園惠真

全 教授 原口虎雄

全 教授 四本健光

全 教授 五味克夫

全 教授 桑波田興

鹿兒島県文化財委員 村野守次

鹿兒島県文化財委員 村野守次

前宮之城町教育長 山下千本

前県立図書館長 芳即正

前鹿兒島県維新史料編さん所編集課長 田島秀隆

所長

岡本政徳

安田繁

川口實

野添峻郎

西迫清成

本田親宣

萩原佳代子

田實勇

下堂園純治

宮下満郎

大徳利男

堂満幸子

久留涼子

坂口香代子

総務課

編集課

鹿兒島県史料

忠義公史料 第四卷

昭和五十一年十一月一日印刷
昭和五十二年一月十日発行

編集 鹿兒島県維新史料編さん所

発行 鹿 児 島 県

印刷 凸版印刷株式会社